

日本国際政治史よりみた日本民族の起源序説

神 川 彦 松

目 次

- 一 序 論
- 二 地球の生成とわが国土の生成
- 三 わが国土の地政学的地位
- 四 わが国土の気流と海流
- 五 人類の生成
- 六 わが民族の発祥についての諸学説大観

一 序 論

いま国史の原始時代・古代に関する出版はまさに花ざかりだ。さながら百花りよう乱の光景だ。ただ疑うらくは、原始時代の研究において諸科学の調査研究が混淆し錯雑して紛然雜然殆んど適帰するところを知らぬ有様であり、特

日本国際政治史よりみた日本民族の起源序説

に全く學問方法論的省察を欠いているということだ。文献歴史以前である先史時代および原史時代の學問的調査研究には地質學 Geology, 生物學 Biology, 化石學 Palaeontology, 人類學 Anthropology, 考古學 Archaeology, 民族學 Ethnology, Völkerkunde, 土俗學 Ethnography, 民俗學 Folklore, 社會學 Sociology, など自然科學および文化科學の諸學の參加・協力を必要とすることは申すまでもない。だからある民族の原始時代を民族史學の視點から調査研究しようとするならば、その民族の對内關係的または對外關係的立場を主たる立場とするものであることは當然の前提であらねばならない。すでに、ある民族例えば日本民族の對内關係的または對外關係的研究を目的とするならば、その研究は、わが民族の歴史科學的研究たる立場を堅持すべきことは當然である。歴史科學的立場に立つ以上は、その研究方法は、どこまでも歴史科學的研究方法によるべきは當然であり、歴史科學的にあらざる他の一切の科學は、すべて補助科學たるにすぎないことは既定論結であらねばならない。

ところが、いま、わが民族の原始時代を研究の課題とするとき原史時代については文献の徵すべきものは、第一に、古事記、日本書記の神代の卷であることはいうまでもない。戦前の国史においては、わが民族の原史時代の研究・叙述は殆ど専ら、わが国の所伝である古事記・日本書記・古語拾遺・風土記に拠っていたのである。だが、わが戦後にいたり神代史は、殆ど専ら、神話・伝説から成る資料に拠っていたという理由で、戦後のわが學界においてはそれは一切、否定され抹殺されて殆ど學界から姿を消した有様であった。これに代わって戦後學界ではとくにわが先史・原史時代の考古學的調査・臆説が猛然として勃興し、さながら群雄割拠の盛況を呈するにいたったことは万人の知るところである。そしてこれらの論者は初めから全くわが国史の立場を逸脱し上に挙げた諸々の特殊部門の立場から新説

・奇論を競い合い紛然雜然たる状況を示していること上述のごとくであるのだ。

想うに由来、日本人の一大欠点は輕佻浮薄であつて極端から極端へ走りすぎることだ。かつてわが「憲政の神」とうたわれた明治・大正・昭和三代の警世家、尾崎弴堂翁は戦後の世情をみて慨然として叫んだ。

「神武天皇建国以来、未曾有の屈辱と損害をうけた今日において、わが同胞は生來かつてなしたことの無いほど深く悔悟反省と謹慎勉勵をなし、もつて起死回生の道を求むべきはずだ。……………」

「風土氣候の影響でもあろうか、わが同胞は敏感にして激昂しやすく、輕佻浮薄にして堅志高情がない。自由民權を主張するかと思えば忽ち全体主義を謳歌し、一敗地にまみれると、更に民主主義に轉換し、昨日は米人を鬼畜とののしり、今日は恩人とあがめるが如きはその一例だ」(卒翁夜話三九～四一頁)

遺憾ながら、尾崎翁が痛切に指摘されたとおりの日本人の一大欠点は典型的に右の国史の研究において再演されたのだ。

戦前のわが国史学界で、殆ど専らいわゆる「皇国史観日本史」が行なわれたのに対し、戦後の国史学界では、これに反して殆ど専ら考古学的国史が流行するにいたつたのだ。すなわちわが国史界は一方の極端から他方の極端へと走つてしまつたのだ。戦前の学界ではそのグランド・クエルレンとして殆ど専ら古事記・日本書紀などの神話伝説のごとき文献史料に拠つていたのに対し、戦後の学界では、一切これらの文献史料を無視して、専ら考古学的資料並びに中国の文献資料に拠ることとなつたのだ。これらはともに歴史科学的方法としては、一方に偏しすぎ公正妥当とはいふをえないのである。神話伝説の如きは、原史時代の資料として妥当であるが、そのみで、わが国史原始時代の史

料として十分ではない。旧石器時代ないし新石器時代におけるわが国土の出土品の如きは考古学ないし人類学・古生物学などの資料としては妥当であるが、わが国史原始時代の史料としては十分でないのだ。わが国史原始時代の史料としては物的資料とともに精神的資料をもとに必要とするものであってこの両者を欠くことはできないのだ。戦前の学界で、考古学的資料の使用が欠けていたのは、国史研究上の欠点であつたと同様に、戦後の学界で、全く神話伝説的資料を無視することは、国史研究上の一大欠点であらねばならないのだ。この両者の両極端を排して、この両者の並用調整を必要とすることは、実証的史家の何人も承認するところであらう。

そもそもわが国史の原始時代はいうまでもなく、わが日本民族の原始時代史であらねばならない。原始時代は先史時代と原史時代とを含む。これはわが民族が、わが国土に發生し、生成した太古の歴史である。これは従つて、わが民族の始祖が、わが国土に呱呱の声を挙げた当初に發足し、それが旧石器時代ないし新石器時代を通じて、いかにして生成發展して古代に到つたかという歴史科学的研究および叙述でなければならぬことはいうまでもない。これは、わが民族の原始時代の歴史であるから、わが国土にわが民族の始祖すなわち原日本人が發祥した時点を起点とするものであってそれ以前に溯ることを必要としないことも当然といわねばならない。ここに、わが民族の原始時代史の歴史科学的限界があり、範圍があることを忘れてはならないのである。

なお本論においては研究の便宜上、わが民族の起源のテーマを主として、地理学的・考古学的・人類学的・民族学的方面より取扱ふこととし、神話的・伝統的方面より取扱ふことを省略した。讀者この点を諒とせられよ。

二 地球の生成とわが国土の生成

わが民族の生成発展の永久的地的基盤はわが民族の固有の国土である。

わが国土はいわゆる大八洲の国、豊葦原瑞穂の国または豊葦原の中つ国すなわち日本列島である。まずこの国土の地質学的生成の跡を瞥見しよう。

地球の歴史を研究する「地史学」 Historical Geology, Geologische Geschichte では地質年代を化石の種類や、地層の岩石的研究などによって、つぎのように区別する。

まず全時代を五つの時代に区分する。すなわち (一) 始生代 Archeologic Era (二) 原生代 Proterozoic E. (三) 古生代 Palaeozoic E. (四) 中生代 Mesozoic E. (五) 新生代 Cainozoic E. である。(一)は学者により四十億年より七億年前と測定される。(三)古生代は (1)カンブリア紀 (2)オルドス紀 (3)シリルア紀 (4)デボン紀 (5)石炭紀 (6)二疊紀に区分される。この期は七億年から二億三千万年にわたると推定される。(四)中生代はさらに (1)三疊紀 (2)ジュラ紀 (3)白亜紀 に区分される。この生代は二億三千万年から七千万年にわたると推定される。(五)新生代はさらに (1)第三紀、(イ)暁新世 (ロ)始新世 (ハ)漸新世 (ニ)中新世 (ホ)鮮新世 (2)第四紀 (イ)洪積世 (ロ)沖積世 に分かれる。この期は七千万年前から今日にいたると測定される。この地質年代はいわゆる相対年代であって、地層の新旧の序列によって定められたものであり、年数によるものではない。年数によるものは、いわゆる絶対年代である。地質年代は自然の記録によるものでもとより正確に年数をもって表現することはできない。その絶対年代の測定は、学者によって区々

であるのはやむをえないのである。上述の推定年数は単なる一例に過ぎない。

しからば翻ってわが国土の地質学的生成はどうであるかというに、わが国土の最古の地層は古生代、デボン紀に属するものであるといわれる。すなわち四億年ないし三億五千万年前と測定される。この地層の上に発達した石炭紀、二疊紀のものもある。これらの地層に含まれる化石は海棲動物であるから、わが列島の古生代では陸地の跡はみられず、まだ海中にあったとみられるのである。

ところが古生代の末には、いわゆる秋吉造山運動が起って、海底が陸化し大褶曲山脈が形成され、中生代の中頃にほぼ完成された。これによってほぼ現在の日本列島に沿って大褶曲山脈が形成され、日本の大部分が陸地となった。この時期は一億八千万年—一億四千万年前と推定される。ただしこの陸地は大陸に続いており大陸から太平洋に突き出していた。

新生代第三紀（七千万年—百万年）にはいると日本列島は依然大陸と陸続きであったが、各所に内湾や入江ができ、北海道の日高山脈は次第に高くなりつつあった。その後地殻に変動を生じ褶曲・断層を生じ、大陸と日本列島の間に日本海が生れた。第三紀の末になるといままで沈降を続けていた地域は隆起するにいたり、ほぼ現在の日本列島に近い形となった。

新生代第四期、洪積世の時代（百万年—一万年）は世界的な氷河時代であり、世界各方面に大陸氷河ができた。日本列島では氷河時代に、平地に氷床ができた証跡はないが、北アルプスや日高山脈などは氷河に被われており、平地でも平均気温は現在よりも遙かに低かった。この時代の日本列島は海水面の低下によって南と北とで大陸と陸続きと

なっており、この陸橋をわたって南からは印度産と同じナウマン象、北からはマンモス象が移ってきた。洪積世の末になると日本列島は大陸から分離し、海洋中に浮ぶ列島となったのである。

洪積世の最後の氷河期が終って氣候が暖かになり沖積世（一万年—現在）に入った。この期に入って富士山をはじめ現在みられる大部分の火山が噴出し、河川の作用によって関東・濃美・大阪など大きな平野ができ、海水面の上昇によって洪積世にできた谷が埋められ、日本列島は現在のような姿になったのである。

註 日本列島の地質学的・地理学的調査研究については夙に明治八年から明治十八年までわが国に滞在して東京帝國大学に地質学を講じ帝國地質調査所の設立を建議して、その技師を勤めたドイツ人 Edmund Naumann (1850—1927頃) の名著 *Ueber den Bau und die Entstehung der japanischen Inseln*, 1885; *Neue Beiträge zur Geologie und Geographie Japans*, 1898 が有名。

三 わが国土の地政学的地位

日本列島の地理上の地位を世界地図でみると、それは東半球の東端に位し、東アジア大陸と一衣帯水を隔てて茫茫たる太平洋の西北の一隅に横わる一連の綵花状の列島だ。それは太平洋の北方カムチャツカ半島から起って、千島・カラフト・日本列島・琉球・台湾・フィリッピン・モルッカを経てニューギニア島にいたる延々たる一大弧形を成す火山列島の一環である。この日本列島がかつてはアジア大陸と陸続きであり、その一部であったように、また上記拳

げた諸々の群島もまたかつては広大なアジア・マレーシア大陸の一部であったことは学者の認むるとおりである。地殻の大變動によってこの大陸の東辺が陥没して海となり、その周辺に残った陸地が上に挙げた諸群島となつて残つたのである。日本列島が地質学的・地理学的に太平洋の西岸に沿つて連なる長い列島の一部であり、しかもオホーツク海・日本海・東シナ海と相對しているというこの地位こそは、天の成した運命的な特性であつて、わが民族の運命に至大の關係を有するものなのだ。

四 わが国土の氣流と海流

わが民族の運命に至大の關係をもつものは日本列島の陸地と海岸の在り方ばかりではない。北太平洋における氣流と海流とは、またわが民族の運命と不可分の因縁があるのである。

第一は日本列島を洗う海流である。その主なものは黒潮（日本海流）と親潮（千島海流）である。

地球は太陽とは反對に西から東へ廻轉するので北太平洋と南太平洋ではともに赤道に沿つてそれぞれ東から西に流れる大きな海流がある。北のものを北赤道流といい、南のを南赤道流という。北赤道流は北太平洋環流となつて北太平洋の周縁を環流する。

北太平洋環流はパナマ地峡の西方の沖合から始まり赤道流となつて赤道の北側に沿つて西流し、ボルネオ・フィリッピン群島につきあたつて北流する。台湾・琉球の岸を洗い九州の南端に衝突して本流支流に分流する。その本流が

すなわち黒潮である。

黒潮は四国の南を東北に流れて銚子沖に達し、次第に日本列島から遠ざかって太平洋にむかい、東進して北アメリカ大陸に衝突する。そしてその西海岸に沿いカルフォルニア海流となって南流し、パナマ地峽の沖に達するのである。この北太平洋環流が一巡するのに二年から三年かかるのである。

黒潮は熱帯の方から流れてくる暖流である。温度が高いからそれが洗う海辺の氣候を温和にする。水蒸気の蒸発が多いから雨量を豊富にする。南方の魚類もこれに乗って日本近海に来るから漁業を盛んにするのである。

九州の南で本流と別れた支流は、九州の西海岸に沿って北流し、対馬海峡を通じて日本海に入る。中国・北国・東北地方の海岸を洗って津軽海峡のあたりまでゆく。このために日本海岸の地方も気温が温和化する。

親潮（千島海流）はベーリング海から起ってカムチャッカ半島・千島列島・北海道・東北地方に沿って南流し、銚子の沖合で黒潮にぶつかって消える。これは寒流であるから水は寒冷で寒い海の魚類を育てるのである。

リマン寒流はオホーツク海の北東隅から起り、間宮海峡を南下して大陸沿岸を洗い、対馬海峡に達する。一部はウラジオストク附近で分派し、暖流である対馬海流と合流して方向をかえ北流して隠岐・能登方面に環流する。

つぎに日本列島に大なる影響を与えるものに季節風がある。夏季には高温な印度洋方面に高気圧を生じるので、シベリアの低温低気圧の方面に向って南の風が吹く。冬季にはその反対に寒冷高気圧のシベリア方面から高温低気圧の印度洋方面に向って北東の風が吹くのである。夏の季節風は多量の湿気を運び暴風雨をひき起す。このモンスーン帯は雨量が豊富なので稲作地帯となる。また気節風は、大体定時に一定の方向に吹くので海上交通の便を供するので質

易風ともよばれるのである。

上述するところにより、わが国土たる日本列島は、一方は大陸に面し、カムチャッカ・カラフト・朝鮮半島という三大陸橋によって大陸に連なり、広大なアジア大陸と密接不離の關係をもっている。同時に他面では茫々たる太平洋に面し、海によってアジア大陸の諸地方・濠亜地中海の島々・太平洋上の諸島と緊密な關係をもっている。しかのみならず海流と気流との媒介によってこれらの諸地域・諸島嶼と密接な關係をもっているのである。すなわちわが日本列島は、その地政学的特性として、広大な「アジア・太平洋圏」の中心に位しているのだ。この広大な「アジア太平洋圏」特に「東アジア・北太平洋圏」の中心に位していることは、わが国土の天与の地位である。この天与の自然的地位こそ、わが民族の形成・発展の永久的基盤となるものである。わが民族の過去における生成・発展はこれによって先天的に規定せられてきたのである。ただに過去にのみとどまらない。これはまた未来永遠にわたってわが民族の運命を規定するものであることを忘れてはならない。

五 人類の生成

人類学からみると、人類がこれに最も近い類人猿とちがう特性は道具の製作・火の使用・および言語の使用である。こういう最初の人類が始めて地上に出現したのは、地質時代新生時代の第三紀の末頃（百万年―五・六十万年）であろうとされる。

人類学上、人類は原始人類 *Homo Primigenius* 又は古生人類と、現生人類 *Homo Sapiens* とに別かれる。原始人類はその使用した道具の發展度を基準とし、その遺物の発見された地名によってまず三期に別たれる。すなわち(1)シエレアン期(地名シエル)(2)アシュレアン期(地名サン・アシュール)(3)ムステリアン期(地名ル・ムステイエ)である。この時期は考古学上のいわゆる旧石器時代の前期にあたるのである。

現生人類は旧石器時代の後期に出現するもので三期にわかれる。(1)オーリニャアン期(地名オーリニャック)(2)ソリュートレアン期(地名ソリュートレ)(3)マグダレニアン(地名ラ・マグダレーヌ)にわかれる。

最古の原始人類の化石が発見されたものに「直立猿人」*Pithecanthropus Erectus*「北京人」*Shinanthropus Pekinensis* がある。人も知るように直立猿人は一八九一—四年、オランダの軍医 *Eugène Dubois* (1858-1940) がジャヴァのベンガワン河畔トリニール *Trinil* で頭蓋骨と臼齒三本と左肢大腿骨を発見し、直立猿人と命名したものである。発見された地層は下部洪積層に属した。ジャヴァは当時アジア・マレーシア大陸の一部であった。北京人は一九二六—三七年、北京地質調査所派遣の発掘隊によって北京西南約五十料の周口店で石炭岩層の洞窟から発見され、カナダの古生物学者 *Davidson Black* (1884-1934) によって命名されたものである。これは老若男女約四十体分の化石人骨が石器・骨器・化石獣骨とともに発掘され、同時に火を焚いた跡も発見された。これらの発掘によって洪積世の前半に東アジアに人類の生存していたことがわかったのである。

原始人類は氷河時代を通じ幾種族にも分れて多くの地域で發展した。直立猿人や北京人よりも後れ洪積世初期にユーラシア大陸に棲んでいたものにハイデルベルグ人 *Homo Heidelbergensis* ネンデルタル人 *Homo Neander-*

thalensis がある。前者はドイツのハイデルベルグ附近マウエル村からシェーテンザック Otto Schoetensack (1850-1912) によって下顎骨が発見されたものでヨーロッパにおける最古の化石人骨である。これは後者の祖先であろうとされる。後者ネアンデルタール人はドイツのデュッセルドルフ附近の溪谷ネアンデルタールの洞窟から一八五六年発見された。これは洪積世中期の最も一般的なもので旧大陸に広く分布し、この種の化石はヨーロッパの大部分のみならず、西アジア（パレスタイン人）中央アジアの諸地、南アフリカ（ローデシア人）ジャヴァ（ゾロー人）などから発見された。原始人類は氷河時代を通じて幾多の地方で幾種にもわかれて発展したが氷河時代の終りまでに絶滅の運命に陥り、地上より姿を消したと考えられるのである。

第四氷河期が終り、後氷期（中石器時代）に入ると人類史上最大の異変が起った。ネアンデルタール人などとは比較にならぬ高度の文化をもつ人類すなわち現生人類が地上に現われたのだ。それにはクロマニヨン人 (Cro-Magnon man) グリマルディ人 (Grimaldi Man) 周口店上部洞窟人などがある。クロマニヨン人はネアンデルタール人より後に出現し、ヨーロッパ全土に分布したコーカソイド系の現生人類の祖先である。これは一八六八年フランス、ドルドーニュ州ヴェーゼル溪谷のクロマニヨン洞窟から発見されたものだ。かれらの遺骨、骨角器文化、洞窟芸術などによりかれらがネアンデルタール人よりも遙かに発達した人類であることがわかる。

グリマルディ人は仏伊国境近くのマントン附近のグリマルディで発見されたものでアフリカのネグロ系で今日の黒人の祖といわれる。北アフリカを中心に地中海沿岸に分布し、ヨーロッパにも進出したがクロマニヨン人によって逐い返されたと見られている。かれらの文化をアフリカを中心とする後期旧石器時代の文化と北方ヨーロッパ文化との

中間のものとみる者もある。

現生人類が原始人類に交代した時期は大体二万年ないし二万五千年前と推定される。この間にシャンスラード人、オーバーカッセル人、プレドモスト人、ブリュン人らが生存したが、これらは原始人類と現生人類の何れにも属さない中間移行層とみられる。一万年前までクロマニオン人はヨーロッパ各地に生存したがやがてアジア方面から西進してきた新興民族のために姿を没した。かくて現在のヨーロッパにはクロマニオン人にとって代った種々の人種の血が混じっている。現生人類出現後人類の外形にはさしたる変化はみられず、その進化は主として知的、精神的方面において示されたのである。

六 わが民族の発祥についての諸学説大観

いま眼をわが国土に転じてわれわれ日本人の祖先（「始祖日本人」と称する）と日本民族の起源をみることにしよう。まず前置きとしてわが国人および外国人による日本人の起源に関する学説史を大観することにする。

わが国においても古くから、石器の由来や先住民族の問題につき説くものは少くなかった。石器や貝塚の由来については夙に「常陸風土記」のうちに貝塚は太古の先住民たる巨人が造ったものだとの説話が出ている。発掘品としての銅鐸については夙に「続日本紀」元明天皇和銅六年の条に記事が載っている。石鐸については早く天降説、天工説が存在したのである。

江戸時代にいたり新井白石は文献学的考証により始めて石器人工説を説いたのだ。かれは石鏃は天工品ではなく人工品で土中に埋れていたものが雨で地上に露われたものであるとし、これは「孔子家語」「国語」などに出ている石弩のことであるからこれを製作使用した者は肅慎国人であると断じた。これは肅慎人が佐渡や蝦夷地へ侵入した時利用したものと説いたのである。

ついで近藤守重・平秩東作・村上三兵衛や弄石家の木内石亭や菅江真澄らもそれぞれ自説を説いたのであった。しかし泰西の近代学術を応用して始めて近代学術的解明を試みたのはオランダ商館の医師として長崎に在住したフィリップ・フオン・シーボルト Philipp Franz v. Siebold (1796-1866) であったのだ。

かれは帰国後著した大著「日本」Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben Schutzländer, 2 Bde, (1832-52) のうちで、日本人種論を試みた。かれは人類文化の発展段階として石器時代、青銅器時代、鉄器時代があるという説を知っており、日本の石鏃などを石器時代の遺物だと判断した。石鏃は主として日本北部で発見されるのでアイヌ人の使用したものとみ、曲玉を使用したのは蒙古的特徴のある日本人であると考えた。そして石器時代には日本にはアイヌ人が居住し曲玉時代には日本人がアイヌにかわったものとみて、日本の先住民族アイヌ説を立てたのだ。

明治初年、オーストラリア公使館附きとして日本に赴任したシーボルトの次男 Heinrich von Siebold は、父の志を継ぎ父のアイヌ説を補充した。(Notes on Japanese Archaeology with Special Reference to the Stone Age, Yokohama, 1879)

しかし大森貝塚を発見・発掘してわが国考古学の開祖となったのは明治十年東京大学教師として来任したアメリカの Edward S. Morse (1838-1925) である。かれは大森貝塚の発掘・調査の結果、日本の石器時代人はアイヌ人ではなくアイヌの先住者「ブー・アイヌ」Pre-Aino であるという説を立てた。エスキモー、アリユート、カムチャダルやアイヌは土器をもたない。アイヌは専ら木器を使用する。貝塚人骨は鍋類で煮るために折られており食人の風習があったと認められる。扁平脛骨の著るしいことなどの理由で貝塚人はアイヌに近似するがアイヌではないと断じたのだ。(Shell Mounds of Omori, 1879「大森介墟古物篇」)

明治時代に入って考古学的方法で初めて日本人種論を試みたのがモースであるとする、これを人類学的方法で試みた者は明治八年わが国に來朝し、東京大学で医学を講じたドイツの医学者 Erwin von Baelz (1849-1927) である。かれは明治十四年日本人の身体的特徴について報告し、日本人は (一) 満洲・朝鮮族、(二) マレー・蒙古族、(三) アイヌ族の三要素から成る複合民族であると提言した。この三者の中前二者が主要素で、(一) は上流社会に多く長身・広頭・長顔・顴骨の突出が少なく往々ヨーロッパ人に似た容貌である。(二) はこれと反対の容貌で庶民階級に多く總体的に頑健で蒙古皺髪をもっていると述べた。(ドイツ語の専門雑誌、横浜で刊行の「東亜における博物学および民族学報告」などへの寄稿 *Über Raasenelemente in Ostasien* 1900)

日本の先住民族については上に述べたように、アイヌ説と、プレ・アイヌ説とが対立していたが、これに対し、コロポックル説を提唱したのが、わが国人類学の鼻祖といわれる坪井正五郎教授(1863-1913)である。かれは夙に明治十九年人類学会を創立し、渡瀬庄三郎の言に示唆をえて日本の石器時代人はアイヌ人ではなくアイヌより先に住ん

でいたコロボックルであると主張したのだ。コロボックルとはアイヌの口碑に伝わる Koropok-kuru 又は Koropok-nu-guru とよばれるもので、「落の下に居る人」という意味である。これは落の葉で蓋われた穴に住んだ極めて矮小な民族だと考えられる。坪井博士は諸種の証拠を挙げてこの人種がアイヌ人でもなく日本人でもない日本の原住民族であると主張した。この説は日本の先住民族に関する盛んな論議の端緒となったのである。（坪井正五郎「人類学叢話」John Bachelor, Pitt-dwellers of Hokkaido and Ainu Place-names considered. 「人類学雑誌」 「史学雑誌」 「理学協会雑誌」 「東洋学芸雑誌」等に掲載された諸論文）

このコロボックル説に対して反対したのは土俗学方面では鳥居竜蔵であり、體質人類学方面では小金井良精であった。坪井正五郎の門下である鳥居竜蔵は北千島アイヌの調査により、かれらは最近まで石器及び土器を使用したこと、それらと類似する遺物を出土する遺跡が本州の石器時代遺跡のうちに多いことを挙げて、この製作者はアイヌであるとし、これをアイヌ式遺跡（現在の縄文式遺跡）と命名し、他種の遺跡（現在の弥生式遺跡）をツングース式のものとしたのである。

小金井良精は北海道アイヌの人骨と石器時代貝塚人骨とを計測値から比較し、貝塚人はアイヌ人であると断じ、コロボックルではないと主張した。これら二つとも、頭蓋骨がやや長く、眉上弓と眉間の発育が強く、頭蓋縫合の鋸齒が簡単であること、尺骨、腓骨、上膊骨肉部、脛骨が何れも扁平なること、しかも他面現代日本人との類似が少ないことを挙げて、かれらがアイヌであると主張したのだ。

明治時代、および大正初期における日本人種論は上にのべたように、主として日本の原住民はアイヌであるか、非

アイヌであるかの論争であつて要するに日本の先住民族は何であるかの論議であつた。ところが今日の日本人の起源は何であるか、その生成は何であるか、その構成要素は何であるかについての論議は古くから存在したのである。

これを大別すると要するに「單元論」Monogenism 「多元論」Polygenism に帰着するのである。

明治以前で神話伝説を根拠として日本人の由来を解説した諸論は暫く措き、考証学的方法で日韓同源論を提唱した藤貞幹 (1780—1797) の説は逸するをえない。かれは日本語と朝鮮語との比較研究、この両民族の民俗・文化の比較考証から、この両民族は始祖を同じくする兄弟民族であるとしたのである。〔衝口発〕

またオランダ東印度会社の医員として 1690—1692 (元禄 3—5) 長崎に在留したエンゲルベルト・ケンプ・エル Engelbert Kaempfer (1651-1716) は帰国後「日本誌」Geschichte und Beschreibung von Japan (1779. 英文版は 1727) を著わして、言語の比較から、日本人はバビロニアより起ると説いたことは人の知るところである。

明治時代に入ると、木村鷹太郎はギリシャ語との比較から日本人ギリシャ起源を説き、石川三四郎はフランスの著書に示唆をえて日本人スメル起源説を立て、牧師小谷部全一郎は日本人は失われたイスラエル十二支族の一つであり神道はユダヤ教の一派であると主張した。また 1870-1874 (明治 3—7) 日本に在留し帰国後熱心な日本紹介者となつたアメリカ人教師 William E. Griffis (1843-1928) は日本に関する著述のうちで、言語・風俗の類似から、日本先住民アイヌ説とは別に日本人は蝦夷人から出たという蝦夷起源説をのべた。有名なドイツの一元的進化論者 Ernst H. Haeckel 1834-1919 は主として言語の類似から日本人韓祖人起源説を立てた。また田口卯吉は風俗上から日本人匈奴起源説を主張したのである。このように日本人の外国起源説は日本人国内起源説に比べて多種多様にわたり挙げ

尽くすをえない有様であった。

大正の初め頃までに日本の先住民はアイヌであり、日本人の始祖は弥生式土器を携えて後れて日本列島に進入してきたツングース系の種族であり、この両者が接触・混淆・抗争・融合して、次第に日本人となったという日本人混血人種説が勝利をえた観があった。しかるにその後、日本人一元論に近いものと、日本人多元論に近いものと並び起り甲論乙駁なお底止するところを知らぬ有様である。

鳥居竜藏 1870—1953 は日本石器時代人は縄文土器を使用するアイヌであり、石器時代後期に弥生式土器をもつツングース族が朝鮮半島を経由して列島に侵入して日本人の祖先となった。この「固有日本人」を根幹として先住民アイヌ、日本に銅鐸をもたらした西南シナ原住民である苗族、すなわち古代に倭人とよばれた印度支那族、フィリピン・台湾を経て南九州に渡来したインドネシア族すなわち隼人、朝鮮半島や海を経て渡来した漢民族の血が混淆して日本民族を生成したと論じた。これは五種族混血説である（「上代の日向延岡」「千島アイヌ」「上代の東京と其周囲」「有史以前の跡を尋ねて」など）

考古学者浜田耕作（1881—1938）は広く東亜諸地の考古学的調査に基づき一種の日本人論を立てた。かれは縄文土器と弥生土器の存在は日本の古代文化の二つのフェーズを示すものであるとし、縄文土器を作ったものは新石器時代の古いフェーズであり、弥生式土器をもつフェーズは金石併用期のものである。古いフェーズの担任者たる人種はコロボックルというエスキモー類似の人種でもなく、アイヌの祖先、すなわち史にみえる蝦夷でもなくまたアイヌに近いアイヌでない一種の類アイヌ的人種でもない。それはすでに各地方で若干の形質差を示し、アイヌ的特質も日本人

的特質も併せもっており、かつ弥生式土器使用者と血縁的關係をもっておるものである。この二つのフェーズの間には相互に密接な関連があつてその間に間隙はない。古いフェーズの上に新しいフェーズのものが加わつて今日の日本を形成人するにいたつたのである。弥生式土器の担任者は今日の日本人にかなり近い性質をもっており、それを「日本人」と称する。

第一のサブストラーツムとしての縄文式土器の担任者は北ヨーロッパから北アジアに拡がった新石器文化を受けた一部族が北方から列島に進入してきたものだ。これを根幹として北方では基礎的人種の一たるアイヌと接触してアイヌ的なものを形成した。西南では南方的人種の要素を混入し、マレー・インドネシア的なものを形成した。そこへ新石器時代の終末期から金石併用期の始めに、朝鮮半島方面から金属器文化をもった朝鮮・シナ系の人種が進入して混血し、もう一つの新サブストラーツムとしての原日本人を形成するにいたつた。この時期は相当古く西紀前数百年ないし千年に遡るだろうと説いたのである。（「東亜文明の黎明」「東亜考古学研究」）

日本人混血論の一典型を吾輩は文化史学・文化人類学・考古学・土俗学の開拓者の一人、西村真次博士にみる。氏はその懐抱する文化地帯・文化圏・文化移動の理論に基き日本古代文化の移動経路とその形成要素 *Ethnic elements* の考察から各文化要素の系統を明らかにしようとし、それは混血人種の移動経路と関連するものとしてその構成要素をつぎの六人種であるとの結論に達したのだ。

- (一) 日本列島に最も早く南方移動線を通じて移動してきたのはジャングル地帯に位するアンダマン島のシンコピ族、マラッカ半島のサカイ族、フィリッピン群島の山地に住むアエタ族のようなネグリート *Negrito* の一派で

あった。この種族は東南アジアの広き範圍にわたって太古最も早き時期に分布したものである。かれらは季節風や潮流に乗って南日本に漂着したのだ。日本人のうち特に矮小短軀・黒膚・縮毛・厚反唇・低鼻等の形質の現われるのはこの人種の混血の影響とみるべきだ。この移動は少くとも西暦前三千年を超える時代である。

(二) つぎに北方移動線を通じて露領沿海州グラツカヤ方面に住んでいた白人系の旧アイヌ族 *Palae-Ainu* が北方から列島に進入した。かれらは黒竜江の航行から習得した技術で間宮海峡をわたり樺太・北海道・本州に移動し日本全土に分布した。縄文文化はかれらの文化であり四部族にわかれる。(イ)海岸に居住し漁撈生活を営んだ海岸部族(ロ)山地に居住して狩猟生活を営んだ山地部族、(ハ)東北・北陸に定着した雪国部族、(ニ)本州を突破し九州を越えて種子島・奄美大島・琉球諸島にまで播衍した島嶼部族、だ。この最初の移動は土地の堆積率から計算して少くとも西暦前二千年頃であろう。

(三) 旧アイヌよりやや遅れて、ほぼ同一経路を通じて列島に集団的に移住してきたのは、南ツングース族 *Southern-Tunguse* で中国史上では東胡 *Tung-Hu* として知られる種族である。かれらの最初の移住は西暦前千八百年頃と思われる。これは今日のオロツコ族と同一系統の一部族で、夏季に、旧アイヌと同じように間宮海峡から、樺太・北海道の西岸を通り、秋田・佐渡・越後・能登等の日本海海岸に上陸したもので、古典にいう古志国の部族である。また沿海州にいた南ツングースの一部族でゴルト族と同じ系統のもので中国古典にいう肅慎人とよばれるものや後の扶余族の一部と見られるものは西暦前千二百年頃にリマン海流に乗って朝鮮東岸を通り日本海を廻って出雲に上陸した。これが日本人・朝鮮人を形成する主要な民族的要素であって、沃沮・挹婁・濊貊・辰韓の部族と血縁

をもつものである。かれらは出雲を中心として日本海沿岸に分布した出雲人である。更に西暦前六百年代に沿海州方面から朝鮮半島に入ったソロン^{II}ダウル族 *Solon-Daurs* が朝鮮海峡から対馬・壱岐を通じて九州に上陸したのが日向人である。前後三回にわたる南ツングース族の日本移動によって、かれらは形質的にも、文化的にも結局日本人の基本的民族要素を構成するにいたつたのである。かれらは大体ツングース族の純粹な形質的特色をもっており弥生式土器を使用していたから、かれらを「原日本人」*Proto-Japanese* とよぶ。

(四) その頃インドネシア族 *Indonesians* の一部族が先島群島から薩隅半島に上陸した。かれらは矛楯をもち、カインやサロンというふんどしや腰巻を着用し、入墨や彩色をする習慣を伝えた。わが古史にいう隼人がこれである。その移動は西暦前八百年代位であろうかと思われる。

(五) 西暦前六百年代頃から南シナ方面からインドシナ族 *Indo-Chinese* が九州地方に移住してきた。かれらはシナ史上苗族とよばれるもので古史に倭人とよばれるものは大体これにあたる。潜水漁撈をなし農耕を営んだ。

(六) 比較的遅れて漢族すなわち原シナ人 *Proto-Chinese* が西紀前後から有史時代にかけて移動してきたことは文献に明らからぬ。かれらは日本の中枢地帯としての大和河内地方に移住した。

(七) 歴史時代に若干のマライ人 *Malayans* や、蒙古人 *Mongols* や、また直接間接に若干ヨーロッパ人の混血もあったと考えられるが、これらは、わが民族形成上に何等寄与しないものであった。

要するに西村博士は日本先住民としてはアイヌ説をとり、日本人起源論としてはアフリカ大陸起源説をとり始祖日本人は南ツングースの一派、すなわち「原日本人」であると論ぜられたのである。「古代社会」「大和時代」「日本文

化史概論」

清野謙次を指導者としその門弟の一派が多数の古代人の人骨を蒐めこれに対して極めて精緻な人骨計測法を応用した業績は、生物測定学的研究としては注目すべきものである。

この派は日本各地の石器時代遺跡から出土した人骨数千体と、古墳時代人骨、畿内現日本人骨、朝鮮人骨、満洲人骨などを計測した。この計測法は精密を極めたもので各骨各部の長さ広さ等の絶対数と絶対数相互間の百分比を計測し、計測各個の骨一つ一つの変差が平均数の価値に加わるごとき統計学的計算を行って種族的統計をまとめたものだ。

このような研究の結果清野博士は結論している。「余等が上記の計数に抛りて明らかなる如く現存人種との間に斯く計りの差がある石器時代人民はアイヌ人と同一種、或はアイヌ類似人種だといひ得ない。日本石器時代人民は少なくともアイヌ人と似ているぐらいの程度に於て日本人とも似ているのである。然も同時に津雲人は現存人種とよほどかけ離れた体質を持っている。之をアイヌ人と云わず、又日本人と云はずして単に「石器時代人民」と呼ぶのが至当である。勿論此日本石器時代人民は現代アイヌ人及び現代日本人の出現に対する基本人種の一部である。（清野謙次

「日本石器時代人研究」五〇—六二頁）

戦後の学界では、人類学・考古学・民族学的研究が特に脚光を浴びてブーム期に入った。大規模な発掘作業が行われ出土器は無数に上った。日本の原始社会と古代の研究がさかんとなり、日本人種論に若干新生面が開かれたのだ。

戦後学界の傾向を大観すると、日本先住民論で、戦前大体通説と認められたアイヌ人説が衰えた。縄文式土器と弥生式土器の考古学的調査がさかになるにつれ、縄文式土器文化をアイヌ文化、弥生式土器を始祖日本人文化とする

通説が動揺するようになった。

特に戦後の一大発見は日本列島の最初の人類は従前の説のように新石器時代人ではなく無土器石器時代人すなわち旧石器時代人であることがわかったとする点である。明石原人論の再検討、葛生原人・牛川人・三ヶ日人などの出土で、旧石器時代文化の存在が確認されたのだ。縄文式土器文化以前の原文化の調査研究が急速に発達するようになったのである。

右のような状況の下で、日本先住民説が長谷部言人らによって排斥され、日本人は最初から日本列島に居住した始祖日本人から発展したものであつて多くの他種人種の血を混じて合成された混血人種ではないと主張する一派が俄然勢力をもつようになったのである。

なお学界の注目を浴びたものに騎馬民族説がある。昭和二十三年五月岡正雄・八幡一郎・江上波夫・石田英一郎の四人が日本民族についての座談会を開いて討議した。その記録が翌二十四年二月「民族学研究」誌上に「日本民族Ⅱ文化の源流と日本国家の形成」という表題で発表されたのである。この座談会では岡教授がウィーンでシュミット教授の下で研究し、一九三四年ウィーンで刊行した *Kulturschichte in Alt Japan* の書を主題として討議したもので、岡教授はつぎのような意見をのべた。南満洲の東辺に牧畜的・農耕的文化をもつ部族がいたが、西暦紀元後間もない頃おそらく二―三世頃に移動をおこし、朝鮮を短期間に通過し対馬海峡を経て日本列島に上陸した。これが天皇族であるとのべた。この説に対し江上教授は東洋史全般との関連で、いわゆる「騎馬民族論」を披露したのである。

これによると西暦四世紀前半頃、天皇氏を中心とした大陸北方系騎馬民族の部族連合体が南鮮の倭人の植民地を飛

石として日本列島に渡来した。北九州や出雲の弥生式文化期以来の伝統的な大勢力の存在した地域へ敵前上陸するのは困難であつたので、北九州を東に廻り、海峽を通過して豊後水道に入り、日向に上陸した。倭の一派であつた出雲族と妥協し、その上で瀬戸内を経て倭の一大中心地大和を征服したのである。この日本を占領した騎馬民族なるものが、具体的には如何なる民族であつたかは確答は困難であるが、朝鮮半島へ南下した大陸系北方民族が高句麗にしても、扶余にしても、激にしてもいづれも満洲に原住したツングース系統と考えられているから、やはりツングース系統の民族とみて大過ないと思う。

（先住民族論・原日本人論については多くの著作を参照したが特に下の諸書に拠つた。水野祐「日本民族の源流」西村真次「人類学総論」同「世界古代文化史」同「日本文化史概論」Karl Haushofer, Japan baut sein Reich）